

京都大学	博士（地域研究）	氏名	西本 希呼
論文題目	A Descriptive Study of the Tandroy Dialect of Malagasy (マダガスカル語 Tandroy 方言の記述研究)		
(論文内容の要旨)			
本論文は、マダガスカル語 Tandroy 方言の体系的記述を試みたものである。マダガスカル語には約 20 の方言があり、Tandroy 方言は約 50 万人の話者を持つにもかかわらず国の最南端の乾燥地帯で話されているため、マダガスカル国内でもその実態がほとんど知られることなくきた方言である。事実、言語学的データはほとんどない。 西本氏は、このマダガスカル語 Tandroy 方言を 2006 年から断続的に現地調査を行い、その音声、音韻、文法、基礎語彙、口承文芸、そして自然会話などの録音・記録を行ってきた。そしてその一次資料をもとに、この方言の体系的記述を行ったものである。さらに、本論文は、言語の構造的側面のみならず、現地での言語調査を通じて明らかとなったマダガスカルの多言語社会としての実態、Tandroy 民族の文化、自然現象に関する認識や在来技術とその応用についても触れている。 本論文は、第 1 章で研究の位置づけと方法および研究の範囲について述べたあと、3 部 12 章から構成される。第 1 部（第 2 章）では、マダガスカルの多言語社会の現状と動態について述べる。言語政策、言語教育、方言間の相互理解を取り扱い、そしてフィールドワークの参加型調査やアンケート調査で明らかとなった話者の民族アイデンティティーと言語意識について論じる。 第 2 部（第 3 章から第 9 章）は、本研究の中核である。第 3 章は Tandroy 方言の音声と強勢規則について述べる。第 4 章は語根、接辞、重複、複合、名詞化過程などの形態的側面を体系的に記述する。第 5 章では、機能別に品詞分類を行い、各品詞の機能と性質について論じる。第 5 章は動詞カテゴリーを取り扱い、本稿文の中心的論題の 1 つである。第 6 章では、人称代名詞、限定詞、指示詞、場所副詞などの直示表現を取り扱う。また Tandroy 語が示す能格性についてもこの章で述べる。第 7 章では、時制・アスペクト・叙法について概説する。第 8 章は、極性、つまり否定と肯定表現を示す。第 9 章では、数詞の用法について論じる。 第 3 部（第 11 章から第 12 章）は、現地でのフィールドワークをもとに言語調査を行う利点を利用し、言語によって構造化された Tandroy 文化特有の語彙、価値観、表現について分析する。第 10 章では、伝統的社会において、どのように時間を認識し計測するのかという問題を扱い、Tandroy 社会の時間概念や、時を表す表現について詳述する。第 11 章で述べる敬語表現の存在は、マダガスカル語諸方言の中でも、Tandroy 方言に固有の特質である。第 12 章では、動植物語彙、数にまつわる表現や諺について述べる。さらに、マダガスカルの歴史文書に残されていた、古代マダガスカル社会における 10 進法による数え方、かつてのお金の数え方といった数の概念についても述べる。			

第 13 章の結論では、各章の要点をまとめ、今後の展望を述べる。そして付録として、基礎語彙リスト、動詞の変化表、7 編の民話とその対訳を添付している。

西本氏は、将来マダガスカル語と東南アジアの諸言語の比較言語学的研究を行うことを目指しており、そのための事前調査として、すでに 2006 年から 2009 年の間、合計数週間、インドネシアおよびマレーシアでも現地調査を行っている。主としてジャワ語、バリ語、マレー語の予備調査を行い、現地での研究基盤を整えた。そして本論でも、その配慮は十分なされている。

マダガスカル語はオーストロネシア語族に属する主な言語の 1 つであり、マダガスカル語 Tandroy 方言の記述資料が、オーストロネシア祖語の再建といったオーストロネシア諸語比較研究に有益な資料を提供し、また、マダガスカル語の方言連鎖、東南アジア諸語との連続性・非連続性の解明への糸口となることが期待される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、マダガスカル語 Tandroy 方言の総合的研究である。マダガスカルには約 20 のマダガスカル語方言があり、Tandroy 方言は国の最南端部で話され、約 50 万人の話者をもつ。本研究は、現地調査で得た音声、音韻、文法、語彙、口承文芸などの記録・録音とその分析に基づき、Tandroy 方言の体系的な記述を試みたものである。さらに、本論文は、言語の構造的側面のみならず、断続的に 5 年間の現地調査を通じて明らかとなった、多言語社会としてのマダガスカルの社会言語学的状況、そして Tandroy 族の自然現象に対する認識や、数や時間に関する伝統的概念についても分析する。

本論文は、3 部 13 章から構成される。第 1 部では、多言語社会としてのマダガスカルの社会言語学的状況、とりわけ国語、公用語、方言の問題、さらに教育用言語の問題を、植民地時代から現在に至るまで時間軸に沿って考察する。西本氏は首都アンタナナリボと南部のトリアラ市内の公立小学校での参与観察とアンケート調査から、学校教育はフランス語および Merina 方言をベースとした標準語で行われるため、小学生の算数などの教科の習得度が低いことを示した。教育用言語も植民地時代のフランス語、独立後のマダガスカル語標準語、そして再度フランス語というふうに一貫性がなく、さらに 2007 年からは英語も公用語の 1 つとされ学校教育に導入されるに及んで混乱は増幅され、これが教育全般に対する不信感につながっている。

第 2 部は、本研究の中核を成す部分である。まず Tandroy 方言の音声と音韻について述べ、Tandroy 方言には強勢規則があり、これが命令文形成に係っていることを明らかにした。この強勢規則と統語構造とのインターフェースの解明は、本論文の大きな功績の 1 つである。形態論的には、単語を語根と接辞に分け、重複、複合、名詞化過程などのプロセスを体系的に記述する。さらに語類を機能別品詞に分類し、各品詞の特性について論じた上、動詞カテゴリーを取り扱う。動詞カテゴリーにおいては、とりわけオーストロネシア諸語に特徴的な時制・アスペクト・叙法について詳述し、従来 passive と呼ばれていたものが、必ずしも受身を示すわけではなく、例えば「私はあなたが好きだ」は「あなたは私に気に入る」と表現されたり、語用論的条件が整えば命令形もこの構文で表現されるなど多様であることを示した。

第 3 部は、言語によって構造化された Tandroy 文化特有の語彙、時間に関する概念、価値観、その表現について取り扱う。具体的には、伝統的 Tandroy 社会において時間が 24 時間に区分され、それぞれの時間に対応する現地語表現があることを示した。さらに Tandroy 方言には敬語表現が存在し、「頭」「口」などの身体部分名称や「見る」「食べる」などの動詞、さらには「服」「皿」「名前」のような普通名詞にも普通語と敬語の二系列の語が存在することを明らかにした。この敬語の存在は、マダガスカル語諸方言の中でも Tandroy 方言に固有の特質である。さらに付録として Tandroy 方言・英語の基礎語彙リスト、動詞の変化表、7 編の民話とその対訳を添付している。

危機言語や書記資料の限られた言語の記述については、近年その研究の重要性が国際的に認識されている中、マダガスカルにおいては多数の方言が未だ研究の俎上に上

げられていない。その中で、国の最南端の乾燥地帯という環境の厳しい地域で話される Tandroy 方言の総合的研究を 5 年間で纏め上げた西本氏の力量は特筆に値する。

また、従来マダガスカルにはないと言われていた敬語表現の存在を Tandroy 方言の中に確認したことは西本氏の研究の大きな功績である。敬語の存在はマダガスカル語諸方言と東南アジア諸語を繋ぐ大きな特徴でもある。西本氏は本論文ではマダガスカル語 Tandroy 方言の記述研究をアフリカ地域研究の一環として行ったが、マダガスカル語はオーストロネシア語族に属する主要な言語の 1 つであり、西本氏の視点は、すでにアフリカを超え、広くオーストロネシア諸語へと向っている。

本論文の特徴は、まず何よりもマダガスカル語 Tandroy 方言の体系的記述を地域研究の立場から総合していること、そして研究が全オーストロネシアという広い比較言語学的視点から行われていることである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 23 年 1 月 21 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。